



# 見捨てられた万能者は、 やがてどん底から成り上がる 3

Q L P H F L I G H T

グリゴリ  
*Gurigori*



アルファライト文庫



アイリ

魔法が得意な「賢者」。  
『銀狼の牙』の  
ムードメーカー。

ベロニカ

没落した貴族家の長女。  
借金を返済するため  
冒険者をしている。

マルティ

『銀狼の牙』に  
所属する「聖女」。  
優しい性格だが、  
怒らせると怖い。

五つ子狼

レイアの子供達。  
性格も能力もバラバラだが、  
みんなお母さんが大好き。

レイア

めず  
雌のシルバーフェンリル。  
オークに襲われている  
ところをクロードに  
助けられた。

クロード

本作の主人公。  
超器用貧乏なジョブ  
「万能者」である事を  
理由にパーティを  
追放された。

ナビー

さんぽう  
クロードの参謀役の  
女の子。元はレベルアップ  
を告げるだけの  
概念だったが、  
彼に体を与えられた。

MAIN CHARACTER  
登場人物紹介

## 第一章 王城パーティーとスタンピード襲来編2

りが経過した。

クロードがクリエール王国最強のSランクパーティ『銀狼の牙』を追放され、二年あま  
りが経過した。  
彼が追い出される理由となつた超器用貧乏なジョブ『万能者』。これは一定の動作を複  
数回行う事でスキルや魔法を習得出来る特別なジョブだった。  
クロードは『万能者』を進化させ、さらなる力を身に付ける。

そして、シルバーフェンリルのレイアやその子供である五つ子狼達、レベルアップア  
ナウンスが肉体を得た存在である少女——ナビーといった頼れる仲間と共に、冒險者パ  
ティ『天の祝福』を結成。  
各地で活躍してAランクパーティとなり、勇者パーティの候補となつたのだった。  
ところが、勇者パーティ候補として王城のパーティへ招かれた『天の祝福』のもとに、  
モンスターの大群が四つのダンジョンを出て王都に迫つて、いるとの急報が舞い込む。  
『銀狼の牙』のリーダーだったシリウスが捕まり、彼の『魅了の魔眼』による文配を解か

れたかつてのパーテイメンバー、ケイト、マルティ、アイリと一緒に、クロードは王都の窮地きゅうぢを救うべく動き出したのだった。

\*\*\*

王城の会議室を出たクロードは、五つ子狼達を亜空間あくうかんから出し、『銀狼の牙』の面々に紹介した。

現在、王都には東西南北全ての方角からモンスターが迫ってきており、『天の祝福』、シリウスが抜けた『銀狼の牙』、そして王国の騎士団と魔法師団で撃退げきたいしていく事になる。

夜を徹しての戦いになるだろう。

クロードはそれぞれの配置に就く仲間達と別れ、レイアと五つ子狼の一匹、ボロを連れて担当場所へ向かっていった。

クロード達が南門に着くと、既に到着していた騎士団と魔法師団の兵士達が慌ただしく働いていた。王都の外から順に第一、第二、第三の防衛ラインを敷き、南門を最終防衛ラインとするつもりのようだ。

クロードは南門防衛の責任者達がいるという天幕に向かった。

責任者の代表は第三騎士団の團長だ。

クロードがどこでモンスターの大群を迎撃むかうてば良いか聞くと、男は面倒くさそうな顔をした。

「おお、これは、これは、小汚いお邪魔虫の冒險者こまななとその従魔じやまむしではないか。やれやれ、今回の討伐戦とうばつせん、我々騎士団と魔法師団だけで事足りるこゝたるといふのに、こんな冒險者こまななに救援きょうげんを頼むなど……国王陛下はいつたい何を考えられておられるのか。私には理解出来んよ」と嫌味いやみを言い、南門の指揮官はさらに続ける。

「おつと、どこに行けば良いかだつたな。お前達は我々エリートの邪魔じやまでしかない。この最終防衛ラインである南門の端はしっこで、指をくわえて我々の雄姿ゆうしを見ているが良い。では王の事を馬鹿まづかにしていると思ひます。主様あつさまもそう思ひませんか?」

「そうだね。あの物言ひはいささか不愉快だね。まあ良いさ、最初は彼らだけで戦つても

らおう。彼らの実力ではモンスターの大群を抑えきれないだろうから必ず助けを求めてくると思うし、それまでは高みの見物といこう』

『念話』を使って怒りを伝えてくるレイアを宥めながら、クロードは南門の端に移動した。

『あく、みんなのところはどうなつてているでしようか。わたくし達と同じ対応をされて

いないと良いのですが。特に東門の防衛を担当するマールさんなんかは、あんな態度を取られたらもう戦わないなんて言い出しそうです』

「はは、まあ大丈夫じゃないかな。向こうの指揮官は騎士団長だから、この指揮官のような尊大な態度は取らないと思う。さあ、俺達の出番が来るまでテントの中で寛いでいるよ」

クロードはテントを取り出し、中に入る。

『さあ、ボロもテントに入りますよ』

『はーい、ママ。主様、オレ、お腹が空いちやつた。中で何か食べて良い?』

『そうだね……俺達の出番が来るまでそれ程時間はかかるないと思うから、何か簡単な物でも作ろうか』

『やつた。じゃあ、早く早く!』

クロードがキッチンで軽食を作り始めるとき、魔法が着弾したかのような音が遠くから聞こえてきた。

『お、どうやら第一防衛ラインで戦闘が始まったようだね。敵も王都まではまだ距離があるんだろう。よし、特製のオムレツが出来たよ。今のうちに食べちゃおう』

クロード達がオムレツを食べている間にも、戦闘音はどんどん大きくなっていく。次第にモンスター達の雄叫びも聞こえてきた。

そんな中でもクロード達に動搖はない。  
オムレツを食べ続けているとテントの入り口が勢いよく開き、あの失礼な男——南門の指揮官が入ってきた。

彼は真っ直ぐクロードに近づき、料理を載せていたテーブルを蹴り倒した。そして命令してくる。

『何を呑気にオムレツなんて食つてやがるんだ。さつさと外に出て最前線に行つてこい。お前達のようなゴミに出来るのは、前線に立つて我々エリートの盾になる事くらいだろうが。オラオラ、さつさとしないか』

先程とは真逆の事を言い、南門の指揮官はクロード達をテントから追い出した。辺りを見回して、口元をニヤリと歪める。

南門の指揮官はテントを出ると、クロードに言い放った。

「このテントは中々の品のようだな。お前には勿体ないから、エリート中のエリートであるこの私がもらつてやろう。ありがたく思うと良い」  
そう言つてテントを奪うと、南門の指揮官は天幕へ戻つていった。

クロードとレイア、ボロは一般の兵士達に連れられて、第二防衛ラインにやつて來た。  
空には月が昇つてゐるが、魔法でそこかしこに明かりが灯されてゐる。

そこから見える第一防衛ラインはまさに地獄絵図で、至るところに兵士の死体が転がつ

ていた。そして、遺体を踏みつけながらモンスターが進軍している。

「これはまた凄い有様だな。最初つから俺達を戦場に出しておけば良かつたのに、自分達だけで戦功をあげたいって欲張るからこんな事になるんだよ。はあ、この戦いが終わつた後が面倒くさそうだな。あの指揮官、絶対に何か言ってくるに違いない。俺達がモンスターを倒したって、どうせ自分の手柄にしようとするだろうしね。はあ……」

『主様のおっしゃる通り、本当に人間つて面倒くさいですね。あ、南門を飛び出して、誰かが走つてきますよ。こちらに手を振つていますが、誰でしようか?』

「んん、本當だ。誰だろ? 見た事がない女性(だけど)」  
クロードとレイアがそんな話をしているうちに、見知らぬ女性は第二防衛ラインまで



やつて来た。そのままクロードに駆け寄り、声をかけてくる。

「お久しぶりです、クロードさん。二年前に王都で顔を合わせて以来ですね」

「ええ？ あなたとは初対面だと思いますが……」

「ああ、あの時は変装をしていました。ちょっと待っていてくださいね」

謎の女性が右手の中指に指輪をはめた。すると、外見がみるみるうちに変化していく。

やがて女性は、追放されたクロードの代わりに『銀狼の牙』に入した男——アレック

スの姿になつた。

「え、えええ！ ア、アレックスさんですよね？ で、でも今さつきまで女人だつたのに。え、どういう事、いつたいどうなつていてるんだ？」

混乱のあまり頭を抱えて唸るクロードに、アレックスが事情を説明する。

「私は王国の諜報機関に所属している諜報員なのです。『銀狼の牙』が勇者パーティ候補として相応しいか見極めるため、かつての私は国王陛下の命でパーティに潜入する事になりました。クロードさん、あなたと入れ替わる形でね。しかし、迷宮都市ゴルドで、リーダーのシリウスをパーティから追放されてしまいまして」

そこで一度言葉を区切り、アレックスは頭を下げた。

「私はケイトさん達がシリウスの『魅了の魔眼』に洗脳されている真実を知りながら、何

もしてあげられませんでした。そしてクロードさん、あなたにも。シリウスからあなたを追放する計画を聞かされていたにもかかわらず、眞の目的のために利用してしまつたのです。スキル『魔眼』シリーズには隠蔽効果が存在します。彼が本当に『魔眼』持ちなのか、確かめるのに時間がかかつてしまつて。上司に相談しつつ、ケイトさん達を救つためにどう動くべきか悩んでいるうちに、パーティを追い出されてしまい……」

「そうだったんですか」

クロードがアレックスの話に聞き入つていると、レイアが割り込んできた。

『あの、お話し中のところ申し訳ないのですが、モンスターの大群がこちらに迫つてきております。いかがいたしましょうか』

レイアに促されてクロードとアレックスが前方を見ると、モンスターの大群があと数百メートルの距離まで迫つていた。

『アレックスさん、話はまた今度にしましよう。まずはモンスター達を一匹残らず殲滅しないと』

「そうですね。それと、私の本当の名前はエルリナと言います。これからはそちらで呼んでください、クロードさん』

アレックス改めエルリナは、中指にはめた指輪を外して女性の姿に戻つた。

クロードとレイア、ボロは兵士達の支援に向かつたエルリナと別れ、一万は下らないらしいモンスターの大群に向かつていった。

\*\*\*

クロード達がモンスターの大群と相対していた頃――

龍王国の元女王で現在はクロードの従魔であるエンシェントドラゴンのマールは、五つ子狼のレイ、『聖女』のジョブを持つマルティと共に、東門の最終防衛ラインからモンスターの大群を観察していた。

「わたくし、これだけの数のモンスターを見るのは初めてですわ。『一万体はある』と聞きましたが、こんなに多いんですね」

マルティは唾を呑み込み、緊張した様子で言う。人化していたマールがその呟きに答えた。

「マルティ、お主<sup>ぬ</sup>が緊張するのも当然の事。わしでさえこのような大群を見たのは、三百年以上生きて一度だけじゃ。その時はBランク以下のモンスターしかいなかつたが、今回はAランク以上の高ランクモンスターもちらほらと見て取れる。ちと気合を入れて事

に当たらないといけないかもしれないのじゃ」

二人がモンスターの大群を見ながら話していると、天幕から東門の指揮官である騎士団長がやつて來た。

「マール殿、マルティ殿、今回の討伐作戦にご協力いただき、誠にありがとうございました。正直に申しまして、あれ程の数のモンスターは我々騎士団と魔法師団では対応しきれないと考えております。あの大群の多くをあなた方に任せてしまふ事になりますが、何卒よろしくお願ひいたします」

「うむ、わかったのじゃ。わしも味方が散らばっていないう方が大技を撃てるというもの。初撃はわしがブレスを放つ。それだけであの大群の半分程は消し飛ばす事が出来るはずじゃ。残りの半分はわしとレイでゆつくり倒して回るとするかの。騎士団と魔法師団は討ち漏らしたモンスターの討伐を、マルティはわしとレイ、兵士達の回復を任せん。心してかかるのじやぞ」

「はい。皆様の手伝いは、わたくしにお任せくださいまし」

『うちもいっぱいモンスター倒してくるから、戦いが終わったら頭を撫でてくれる? マルティ』

レイが口を挟むと、マルティは首を傾げた。

「わたくしでよろしいのですか？」クロードさんに撫でてもらつた方が、レイさんとしては嬉しいんじやありませんの？」

『勿論そうだけど、マルティにも撫でてもらいたいの。それと、もう一つ。この戦場に来るまでの間に、うちの事はレイちゃんって呼んでって言つたじやん。ちゃんと呼んでくれないと、うち、怒っちゃうよ』

「わかりましたわ。それじゃあ、攻撃はマールさんとレイちゃんにお願いしますわね」

「うむ、任せるのじや」

『うん。ドンと任せてよ』

マールとレイは、モンスターを蹴散らすべく第一防衛ラインに向かつて歩き出した。

\*\*\*

クロード達とマール達がそれぞれ王都の南門と東門でモンスターを迎え撃つていた頃、時を同じくして西門でも防衛戦が始まろうとしていた。

西門の第二防衛ライン。

騎士団駐屯地にある会議用の大天幕には、クロードの幼馴染であり『剣聖』のケイト、

『天の祝福』の一員であるベロニカ、五つ子狼のリサの姿があつた。

西門の指揮官である魔法師団長が、ケイト達に作戦を伝える。

「それでは、ケイト殿、ベロニカ殿、大物はあなた達にお任せする事になる。必然的に最前線で戦つてもらう事になるが……我々魔法師団も騎士団も最善を尽くそう。王都を守るために、どうかよろしく頼む」

魔法師団長は深々と頭を下げた。

「団長殿、頭を上げてくれ。私達はこれから共に戦う戦友だ。そのようにかしこまられては困る。こちらにはそういう態度に慣れていない者もいるからな」

ベロニカはそう言うと、自分達のそばで大人しくお座りして話し合いが終わるのを待つていたリサを見た。

魔法師団長はベロニカの視線を追つてリサを見て、そのあまりにも可愛らしい姿についてリサを見る。

「そ、その……先程から控えていてるウルフは、本当に強いのか？　この可愛い見た目からはとても想像がつかないのだが、戦場に出しても大丈夫なのか？」

すると、今まで黙つていたリサが声を上げた。

『あたくしの愛くるしさを理解出来た事は褒めてあげる。けど、あたくしの強さを疑われ

るのは、大変心外ですわね。まあ、その間違った認識も、数分後には覆つてているのでしょ  
うけれど

それだけ言い、リサは頬ほほを膨らませてプリッとそっぽを向いてしまう。

「ははは、どうやら怒らせてしまったようだな。そこまで言うのなら実力を信じよう。そ

れでは、ケイト殿、ペロニカ殿、そしてリサ殿、改めてよろしく」

魔法師団長は苦笑すると、外で待機している部隊に指示を出すべく天幕を出ていった。

\*\*\*

場所は変わり、王都の北門防衛ラインの最前線。そこには、共に戦う者達に指示を出し  
ているナビーと『賢者様』のアイリ、その手伝いをする五つ子狼の二匹——イリアとハロが  
いた。

「そこの魔法士と騎士、ちょっとこっちに来てちょうだい」

アイリが近くにいた魔法士と騎士に声をかける。声をかけられた二人は「いつたいなん  
なんだ」と怪訝けげんな顔をしながら、アイリのそばにやつて来た。

一人が尋ねる。

「お呼びでしようか、賢者様。なんなりとお申し付けください」

「ええ。あなた達がこここの指揮を執る隊長達……という認識で合っているかしら」

「はい」

「そう。それじゃあ、各部隊の隊員達に伝えておいてもらいたい事があるの。開戦して直す  
ぐ、ナビーがあなた達に攻撃力上昇、防御力上昇、速度上昇、魔力強化の支援魔法をか  
けるわ。たまに急に自分が強くなつた事に驚いてパニックを起こしちゃう人がいるから、  
ちゃんと言つておいてね」

「はい。わかりました。ただちに隊員全員に通達いたします」

隊長達は頷き合い、急いでその場を去つていった。

伝達を終えたアイリとナビーは、イリアとハロを連れてこれから戦場となる平原を一望  
する事が出来る第三防衛ラインの高台まで下がつた。迫り来る一万ものモンスターの大群  
を観察する。

ナビー達が戦場の様子を窺い始めてから三十分程が経過した頃、平原の奥の方で土煙つちけむり  
が見えた。走ってきた偵察班の隊員は、モンスターの大群が第一防衛ラインに近づいてきた事を報

告する。

「わかりました。では、手筈通りにいきましょう。各部隊に戦闘準備をするよう伝えています」

「はっ、承知しました」

ナビーは報告に来た偵察班の隊員と近くにいた騎士に指示を出し、支援魔法の発動準備に取りかかった。

やがて、最前線の騎士達がモンスターの大群に向かつて駆け出していく。魔法師団の魔法士はモンスターに攻撃魔法を撃ち込むべく、構えを取った。

ナビーはそんな彼らに一斉に支援魔法をかける。

騎士団と魔法師団全員にバフをかけ終えたナビーは、アイリとイリア、ハロを連れて第一防衛ラインを目指して移動を開始した。

あつという間にナビー達は目的地に到着した。

そのまま最前線に突っ込んでいくナビー、イリア、ハロと別れ、アイリは魔法師団に合流する。そして、モンスターの大群目がけて攻撃魔法を放つ。

「第三魔法部隊、あなた達だけ前に出すぎているから周りと足並みを揃えて。第二魔法部

隊と第五魔法部隊は、最前線で戦っている騎士達にさらに支援魔法をかけてちょうだい。その他の部隊は攻撃魔法を継続して撃ち込みつつ、騎士達の援護をしなさい。では、行動開始！」

アイリの指示を受けた魔法士達は、与えられた役割を果たすために各自準備に取りしかつた。

一方、最前線に向かったナビーとイリア、ハロは、モンスターの大群からおよそ百メートル程の距離まで接近していた。

「イリア、ハロ、準備は良いですね？」

『ええ、いつでも突っ込めるわよ』

『おいらもいつでも行けるよ。戦闘支援はおいらに任せよ！』

『ええ、お二人ともよろしくお願ひしますね。では、参りましょう』

ナビーとイリアを前衛に、後ろをハロが追随する形でモンスターの大群へ近づいていく。まず、ナビーはオリハルコンの剣に、イリアは自らの爪に少量の魔力を纏わせた。そして魔力の性質をナビーは火に、イリアは風に変えて、大群の最前列にいるモンスター達を切りつける。

ナビー達が放った火と風の斬撃は融合し、巨大な炎の竜巻となつてモンスターの大群を襲つた。

炎の竜巻は次々とモンスター達を吸い上げて塵へ変えていく。

ナビーとイリアがモンスターを蹴散らす隣では、ハロが土魔法の『アースウォール』を発動して周囲の守りを固めていた。敵の攻撃をかいくぐり、ハロはナビー達に襲いかからうとするモンスターを岩魔法の『ロックバレット』で的確に撃ち抜いていく。

「あら、初動は中々良い感じですね。イリア、これから群れの中に突っ込みますが、準備は良いですか？」ハロは今まで通りに土魔法と岩魔法でサポートを行つてください。攻撃は余裕があつたらで構いませんからね」

『ええ、わかつたわ。私のこの爪でモンスターどもを蹴散らしてあげるわ』

『うん。おいらも頑張っちゃうよ！』

『ええ、二人とも頼りにしていますよ。では、突撃します！』

『わかつた（わ）』

真つ先にモンスターの群れに飛び込み、ナビーはオリハルコンの剣を振るう。イリアは自慢の鋭く頑丈な爪と牙で、群れの先頭にいるモンスターに飛びかかつた。ウルフ系、ボア系、ベア系の低ランクモンスターを蹴散らしていく。

ハロは一人の背中を守りながら、自らも魔法と爪、牙を使って適度にモンスター達を倒していくた。

ナビー達が戦う一方で――

魔法師団と共にモンスターを後方から攻撃していたアイリは、魔力がすっからかんになつていた。肩で息をしながらも手持ちの魔力回復ボーションを何本も飲み、なんとか魔力を回復させる。

そして、後方を魔法師団に任せ、前線に向かつたナビー達と合流する事にしたのだった。  
「ナビー達、だいぶ暴れたわね」

最前線には色々な種類のモンスターの屍が至るところに転がつていた。

「とりあえず三人と合流しないと」

アイリはモンスターの死体が転がる戦場を歩き、ナビー達を探す。

しばらく進むと、遠くの方から戦闘音が聞こえてきた。

「音がするのは……こっちかしら？」

アイリはだんだんと大きくなる戦闘音を頼りに、ナビー達の居場所を探る。

やがて多くのモンスター達に囲まれながらも、何者かが戦つている光景が見えてきた。

「ちょっと遠目にはわかりにくいけど……たぶん、あれがナビー達ね」  
ナビーと思われる人影を目視したアイリは、自身の足に風魔法の『ウインド』をかけてその場に急いだ。

「ナビーとイリア、ハロはここまで激しい戦闘によって魔力枯渇状態に陥りながらも、今なお必死に戦っていた。」

「はつ、はつ……ちょっと最初つから飛ばしそうになりました。そろそろ後方に下がつて魔力を回復したいところですが、そのためには私達を開むモンスターの包囲網をどうにかしないといけません」

ナビーが自分達を開い込んで殺そうとするモンスター達をどうやつて突破するか考えてみると、視界の端にハロに攻撃を仕掛けようとしている数体のモンスターの姿を捉えた。ハロはどうやら背後のモンスターに気付いていないようだ。ナビーが慌てて危険を伝えようとした瞬間、突然強風が吹き、ハロの後ろにいた敵を空中へと舞い上げた。そこに大量の風の刃<sup>やいば</sup>が殺到し、モンスターを切り刻む。

ナビーは突然の出来事に驚き、咄嗟<sup>とつさ</sup>に自分の背後を振り返った。するとそこには、苦しそうにお腹をさすりつつこちらへ歩いてくるアイリがいた。

「ア、アイリさん、応援に来てくれたのですね。危うくハロが怪我をしてしまうところだったので、助かりました。ありがとうございます。それで……そんなに苦しそうにお腹をさすつてどうしたのですか？」

ナビーが心配そうな顔をして聞くと、アイリはぱつ<sup>ぱつ</sup>の悪そうな顔をして口を開く。

「後方で魔法を撃ちまくつちやつ……魔力回復ポーションでお腹いっぱい、気持ち悪いのよ。ぶつちやけて言うと、今にも吐きそうなくらい」

アイリは苦笑いを浮かべた。そしてこちらを攻撃しようと窺つて<sup>いわ</sup>いるモンスター達を一瞥<sup>べ</sup>し、ナビーとイリア、ハロに話しかける。

「……つてわけだから、お腹に溜まつたボーションを消化するためにも、この場は私が引き受けるわ。だから、今のうちに魔力を回復してきなさい。そのくらいの時間稼ぎなら、私一人でも余裕だから」

「そうですか。それではお言葉に甘えさせていただきます……アイリさん、あまり無茶はしないでくださいね。危ないと思つたら躊躇わ<sup>ためら</sup>ず、直ぐに引いてください。私達も急いで戻りますので」

「ええ、わかっただわ」

鳴き声を上げたハロとイリアを見て、アイリは首を傾げる。

「この子達、今なんて言つたのかしら？」

「……『アイリお姉ちゃん、気を付けてね』って言つて いますよ」

「そうなの。ナビー、『心配しなくても大丈夫よ』って通訳してくれるかしら？」

「その必要はありません。この子達は言葉を理解していますから、アイリさんの言葉はちゃんと伝わっていますよ」

「それなら良いわ。さあ、早く行きなさい」

アイリにこの場を預け、ナビー達は後方へ下がつていった。

最前線に一人残つたアイリは、ナビー達がここに戻つてくるまでの時間を稼ぐため、あらゆる魔法を駆使して戦つていた。

「それにしてもキリがないわね。いつたいあと何体いるのよ、モンスターは……魔法をいくら撃つても絶え間なく湧いてくるし」

そろばやきながらも、アイリは懸命に攻撃魔法を撃つ。

「はああああ……『フレイムゲイル』！『ロックブラスト』『ウインドカッター』！『ブリザードストーム』！！はつ、はつ、やっぱいわね。また魔力が枯渇しそう。ナビー達

はまだかしら？」

魔力枯渇が間近に迫り、アイリは初級火魔法と初級風魔法を組み合わせた複合魔法『ファイアーウィンド』を使って魔力を節約しつつ、敵を倒すのではなく、時間稼ぎに専念する事にした。

『ファイアーウィンド』を使ってから十数分後。いよいよアイリの魔力が枯渇するかと思われたその時、遂に待ちに待つた人物が現れた。

「お待たせしました、アイリさん、おかげさまで魔力も体力も十分に回復出来ました」

「やつと戻ってきたわね、あなた達。私は魔力が尽きたから、また魔力回復ポーションを飲んでくるわ。魔力が回復したら直ぐ戦闘に戻るから、あなた達で先に戦ついてちょうだい」

「わかりました。あまり急がなくて良いですからね」

ナビーはアイリを気遣うと、イリアとハロを連れてモンスターを雑ざつ倒していくた。

魔力回復ポーションを飲み、アイリは直ぐに戦闘に復帰した。色々な中級の攻撃魔法を駆使し、残りのモンスターを駆逐していく。

四人の活躍で、北門を目指していたモンスターの大群は掃討された。

「ふう、やっと終わつたわね。途方もない数のモンスターだつたわ」

「ええ、全くですね。少し休んだら、手分けして他のところを手伝いに行きましょう」

「そうね。どこに行こうかしら」

「私とハロがケイトさんのいる西門に向かいます。アイリさんは、イリアと一緒にマールさんのところ——東門へ行つてください」

「わかつたわ。でも、クロードがいる南門に加勢しなくて大丈夫?」

「マスターなら平気ですよ。とても強いですから」

ナビーがそう答えた時だった。

ナビー達のそばで休んでいたハロとイリアの体がまばゆい光に包まれる。

「こ、これは、どうしたの? この子達は大丈夫なの?」

突然の出来事にパニックになり、アイリは慌ててナビーに聞いた。

「これは進化の前兆ぜんちようですから、心配しなくて大丈夫です。それにしても、この子達はいつ

たいどのような種族しゆぞくに進化するのでしょうか。とても興味深いです」

イリアとハロが輝き出してから数分すると、徐々に光が収まってきた。

そして光が完全に消えた後、そこにいたのは先程までは全く異なる姿になつたイリア

とハロだった。

イリアは体が二回り程大きくなり、体を覆うように風を纏つていた。強い風が土埃つちほりを巻き上げているが、不思議な事に直ぐ近くにいるナビーとアイリ、ハロには風の影響はない。また、進化前に比べると毛並みがやや緑みがかつっていた。

ハロも進化前より体が大きくなり、額に巨大な一本の角つのくつが生えていた。毛の色も灰色に変わつてゐる。

「あら、二人とも随分すいぶん大きくなりましたね。なんて種族しゆぞくなのかしら? 一人ともちよつと『鑑定かんてい

しますよ』

ナビーはハロとイリアに『鑑定』をかけた。

**【名前】ハロ  
【種族】ガイアウルフ**

**【名前】イリア  
【種族】テンペストウルフ**

「ガイアウルフとテンペストウルフですか。聞いた事がありませんが、アイリさんは何かご存じですか？」

「ナ、ナビー、あなた何を言つてゐるのよ!? どつちの種族もAランク上位の危険指定魔

獣じゃないの！ あなた達、とんでもない種族に進化したわね。まあ、味方なら心強いけど」

「あ」

鑑定結果を確認していたナビーが何故か目を丸くした。アイリは不安そうに尋ねる。

「ど、どうしたのよ。ナビー」

「あ、いいえ。実は、この子達が人化のスキルを獲得してゐたんです。だから驚いてしまつて……」

「え、本当なの？ 良かつたじやない、あなた達」

「ふふふ、そうね」

イリアとハロは声を揃えて返事をした。

「ナビー、二人はなんて言つてゐるの？」

「……『これでやつとアイリさんとお話しする事が出来るね』だそうです」

「ふふふ、そうね」

ほほえ微笑むアイリを見て、ナビーはニヤッと笑う。

「……と、こうして通訳してみせましたが、本当は必要ないんです。この子達、最初から話す事が出来ますからね」

「え、そうだったの？」

「ええ、もともと『念話』ねんわが使えたので……アイリさん、からかわれましたね。さて、十分休みましたから、そろそろ移動しましようか」

「そうね……それにしても私、からかわれていたのね。まあ良いけど。それじゃあ、また後で」

そして、ナビーとハロは西の戦場へ、アイリとイリアは東の戦場を目指して歩き出した。

\*\*\*

西の戦場ではケイトとベロニカ、リサが最前線でドラゴンや巨人、獣などが混在するモンスターの群れと戦っていた。

前衛はケイトが担当し、ベロニカは盾役として敵の注意を引きつつ防御を担う。リサは遊撃ゆうげきとしてあつちこつちでモンスターの群れに大きな被害を与えていた。

「くつ、巨人種の攻撃が重すぎる。あたいだけじや、Bランクまでの巨人種の攻撃しか受けきれない。それ以上のランクが出できたら、押さえられないよ」

ハイトロールの打撃になんとか耐えながら、ベロニカは焦りを口にした。その時、突如として彼女の横を灰色の何かが通り過ぎていった。

次の瞬間、モンスター達が作つていた肉壁の一部が次々飛び

突然の出来事に動搖したのか、ベロニカが押さえ込んでいたハイトロールに僅かな隙が生じる。

ベロニカはそれを見逃さず、ハイトロールに攻撃を仕掛けた。

「仕方ない。魔石は惜しいが、こいつの再生能力を上回る速度の攻撃はあたいじや出来ないからね」

ベロニカはハイトロールの胸の辺りにある魔石めがけて、躊躇いなく剣を突き入れる。

ハイドロールは直ぐに動かなくなつた。

方に目を凝らす。そこには、体長二メートル五十センチ程の灰色の体毛をしたウルフがた

「な、なんだ、あのウルフは。内包している魔力の量が半端ないぞ」

「あれはハロですよ。北門側での戦いを終え、ガイアウルフに進化したんです」

な。まあ、変わらず可愛い顔立ちだが

「ええ、そうですね。全てにおいて同意します」  
ベロニカとナビーが話し込んでいると、ケイトとリサがやつて來た。さらにハロも合流する。

ケイトが小声で尋ねる。

「ベロニカさん、この灰色のウルフはあなた達の仲間なのか？……ん、ナビーさんもいるが、北の戦場はどうしたのだ？」

「ケイトさん達の救援に来たんですよ。北の戦場は制圧しました。それと、この子はハロですよ。イリアと一緒に進化したんですよ。イリアはアイリさんと東の戦場に向かってもらっています」

「そうだったのか。ハロ、警戒してしまつてすまなかつた」

「皆さん、話している暇はないみたいですよ。敵がまた前進してきました。C、Bランク

のモンスターはケイトさんとベロニカさん、リサでほとんど倒していたみたいですね。残りはもうAランクばかりです。最後方から、モンスターではない何者かの気配を感じるのが不安ですが……皆さん、もうひと踏ん張りといきましょう

群れの奥の方で控えていたAランク上位のモンスター達が前進を始める。それを目視したナビーが再び口を開く。

「皆さん<sup>すず</sup>の素のステータスでは、Aランク上位のモンスター達には力が及ばないと思います。だから、私が支援魔法をかけます」

「そうだね、ナビー。あたい達にあんたのありつたけの支援魔法をかけてくれ。それでたぶん、なんとか出来ると思う」

ベロニカの分析で今後の方針が決まった。一行は早速行動を開始する。

ナビーは支援魔法の身体能力超上昇、攻撃力超上昇、防御力超上昇、素早さ超上昇を一人一人にかけ、能力値を何倍にも向上させた。各々がモンスターの群れに向かっていく。「おお、なんとなく普段の三倍くらいまで力が跳ね上がった感じがするな。これならAランク上位どころか、Sランクモンスターもいけるんじゃないかな?」

「ああ、ナビーの支援魔法はかなり効果的だからな。本当に彼女がここに来てくれて良かったよ。クロードの支援魔法がこれよりもっと凄いから、普段は霞んでしまっている

んだ」

ケイトとベロニカはナビーの支援魔法の力を肌で感じながら、モンスターの群れへ突っ込んだ。

ケイトは愛剣、聖剣アロンダイトを握り、眼前に迫ったAランクモンスターを同時に五体も切り飛ばした。

「良いな。いつもよりも体がよく動く。支援魔法の有無でこんなにも違うものなのか」

ケイトはいつになく体が動かしやすい事が楽しくて、ついウキウキしてしまった。  
(ナビーさんでこれなら、クロードの支援魔法はいつたいどれ程の効果を發揮するのだろう。この先の人生で、私が彼に支援魔法をかけてもらう機会は果たしてあるのだろうか。今までクロードと一緒に旅をしてきたナビーさん達が少し羨ましいな)

そんな事を考えながら、ケイトはアロンダイトを中段に構える。そして、目の前に立ちはだかる一つ目の巨人……Aランク上位のモンスター、サイクロプスに切りかかった。

「はつ！ くつ、流石にAランク上位のモンスターだけあって頑丈だな。これは本気を出さないと勝てないか」

ケイトはサイクロプスから一度距離を取り、目を閉じて深呼吸をした。【剣聖の舞】

『剣聖』が持つスキルの一つである『剣聖の舞』を発動したケイトの周囲に、銀色のオーラが立ち上った。

オーラはアロンダイトをも覆い、切れ味と耐久力を向上させる。ケイトは再度サイクロプスに切りかかった。

両者が拮抗していたのは数分間だけだった。ケイトの剣がサイクロプスの脇腹を切り裂き、サイクロプスは大地に片膝をつく。

「よし、ここで罠わなみかける。聖剣術秘伝剣技『魔虎一閃』！ はつ！」

ケイトが『魔虎一閃』を繰り出したと同時に、アロンダイトを覆っていたオーラが黒き大虎の形に変化した。

そして片膝をついて動かないサイクロプスに襲いかかる。

黒き大虎が通り過ぎた後には、上半身と下半身を真まつ二ふたつにされ、絶命したサイクロプスの姿があった。

アロンダイトを振り下ろし静止した状態のケイトが微笑む。

「ふつ、私のアロンダイトで切れぬものなし。はー……今のかつこいいところ、クロードに見てもらいたかつたなー」

ケイトはそう呟き、次の獲物を求めてその場を離れた。

一方のベロニカは、まだまばらに残っているBランクのモンスター達を一体一体確実に倒していた。

その様子を取り巻きのBランクモンスター達の奥にいるAランク上位の獣型モンスター、ブラッドホーンヴァッファローがずっと睨みつけてくる。

「ああああっ、もうなんなのだ、あのブラッドホーンヴァッファローは！ さつきからずっとあたいの事ばかり睨んできて、鬱陶しい。あたいに何か恨みでもあるのか？」

ベロニカはブラッドホーンヴァッファローの前にいたBランクのモンスターを全て倒すと、ミスリルの剣を中段に構え、ミスリルの大盾を前面に持つ。そして、ブラッドホーンヴァッファロー目がけて駆け出した。

ブラッドホーンヴァッファローはBランクモンスターであつた弟を殺され、ベロニカに並々ならぬ恨みを抱いていた。

もちろん、ここが戦場だという事は理解している。戦場で死ぬのは仕方がない事も。

しかし、理性では理解出来ても本能は違う。

ブラッドホーンヴァッファローは突っ込んでくる憎きベロニカを見て、攻撃を仕掛ける事にした。

雄叫びを上げ、ベロニカ目がけて突進する。

急な攻勢を避ける事が出来ず、ベロニカは咄嗟にミスリルの大盾を地面に突き刺して固定した。そして、大盾を両手でしつかりと握りしめブラッドホーンヴァッファローの突進を受け止めた。

「ぐおおおおお！　はっ、流石、上位のAランクモンスター。力が尋常ではないな。ナビーに支援魔法をかけてもらつてなかつたら、今の一撃で吹っ飛ばされていたところだ」  
ベロニカはブラッドホーンヴァッファローの突進で崩された体勢を整えつつ、大盾を地面から引き抜いて構え直した。

「次はこちらからいくぞ」

体勢を整えたベロニカはブラッドホーンヴァッファローの側面に回り込んだ。そして渾身の一撃『シールドバッシュ』を叩き込む。  
「グッガアアアアア」

ブラッドホーンヴァッファローは口から血を吐き、苦痛の叫びを上げながら数メートル吹き飛ばされた。その場で倒れ込む。

「まだまだ、終わらねえぞ」

ベロニカは苦しみもがいて中々立ち上がりがずにいる相手に追撃を仕掛ける。

「はっ、『スラッシュ』『スラッシュ』『インパクト』！」

ベロニカが放つた攻撃により、遂にブラッドホーンヴァッファローは絶命した。

「ふう、ふう……中々手強い相手だった。少し魔力を消費しすぎたな」

ベロニカはポーチから魔力回復ポートションを取り出して一気に飲み干すと、その場を立ち去るのだった。

\* \* \*

ベロニカがブラッドホーンヴァッファローを倒していた頃、東の戦場にアイリとイリアが到着した。ここにはエンシェントドラゴンのマールがいたため、有利な状況で戦いを進めていた。

王都クエールを目指していた巨人達は、人化を解いてエンシェントドラゴンへ変化したマール、そして五つ子狼のレイと聖女のマルティによるサポートに大苦戦しながら、少しずつ前進しようとする。

しかし、そんな巨人達のもとに突如、全てを吹き飛ばすような暴風と多種多様な魔法が雨のように襲いかかつた。

『ん、なんじやあの暴風と魔法は？ いつたい誰が撃ったのじや』

突然の事に驚き、マールが動きを止めると背後から声がかかった。

『中々押しているじやない。でも、マールさんだけだと大変だろうし、イリアと私の魔法でみんなの援護をしてあげるわ。そうすればマールさんがもつと前線に出られるでしょ』

アリの声だった。

『なんじや。お前達であつたか。確かに、わしも前に出て戦えるのなら樂にこの戦場を蹊蹠出来る。が、覚醒した眞の賢者ならともかく、お主はまだ賢者見習いのようなものじやろう。Bランクならいざ知らず、Aランクのモンスターにお主の魔法は通用するのかのう？』

「ええ、その辺りは問題ないわ。ナビーにかけてもらつた支援魔法がまだ効いているから。ナビー曰く、あと五時間くらいは効果が続くみたい」

『そうか、ではこれでこちらがさらに有利になつたのじや。先程レイが進化してのう。Aランクモンスターのインフェルノウルフになつたのじや。前線で戦つているイリアを見るに、どうやらそちらも進化したみたいだしのう。こちらには優秀な回復役もいる事だし、樂勝なのじや。お主にかかる支援魔法の効果が切れる前にかたを付けるとするかのう』

「優秀な回復役だなんて恐縮です」

マールに褒められ、マルティは謙遜する。

「へえ、イリアが進化したつてよくわかつたわね……つて、あれだけ姿が変われば一目瞭然か。イリアはテンペストウルフになつたのよ。無論、Aランクのモンスターよ。マルティ、マールさんに褒めてもらえて良かったわね。さてと、それじやあ行きますか」

アイリのかけ声と同時に、マールは前に飛び出した。

翼を羽ばたかせたマールは、巨人の群れの奥に見えるSSランクのモンスター——ギガントサイクロプス目がけて飛んでいく。

レイとイリアは、群れの最前列で重たい体を引きずるように歩いてくるトロールナイトなどのAランクモンスターを中心的に倒すつもりのようだ。

アイリは勝手に先行していくつてしまつたマールの後ろ姿を見つめて愚痴を言いつつも、ファイアドラゴンの角で作られた愛杖のレッドホーンを片手に構えた。

マルティが負傷した兵達がいる治療テントに残るので、テントを守れるようにと前には出すぎない。